

近現代文化蛭学

保科英人

〒 910-8507 福井県福井市文京 3-9-1 福井大学教育学部

Cultural Coleopterology (Lampyridae) in the Modern Japan

Hideto HOSHINA

「蛭が嫌い」。そう言う日本人は相当の偏屈者のはずである。普段どれだけ自然や昆虫に関心がなくとも、闇夜に舞う蛭の光を美しく、または儂い想いで観るのが平均的日本人と言うものだ。日本書紀と古事記の日本神話には生物キャラクターとしてのホタルは登場しない(保科, 2017)。しかし、万葉集が編纂された奈良時代以降の古典や和歌集にはホタルを題材とする事例が増えてくる(遊磨・後藤, 1999)。例えば、『源氏物語』(第25帖「蛭」)には部屋に引き籠った玉鬘の気を引こうと、源氏の君が袖に隠していた多数のホタルを一斉に放すシーンがある。

都市化が進んだ現在、いや都市化した故にと言うべきか、平成日本人にとってホタルは格別の存在である。その特別性は直接的経済利益を生み出すミツバチやカイコとほぼ同格のようにも思える。筆者は福井県内の高速道路や新幹線建設に絡む環境アセスメント関係の諸委員会の末席を汚しているが、「大型公共工事によるゲンジボタルやヘイケボタルへの影響をどう軽減するか」との審

議が必ず起こることを目の当たりにしている。ふと考えると、ゲンジボタル・ヘイケボタルとも福井県レッドリストに挙がっていない普通種のはずである(福井県安全環境部自然環境課編, 2016)。とは言え、「地域の人に愛されている」との非動物学的理由であったとしても、シンボルとしてのホタルの保全是重要だろう。



図1. ヘリボタルの模型(2007年シーエムズコーポレーション) © タツノコプロ。

詩歌、映画、文学などに登場するホタルをしらみつぶしに調べ上げれば、『文化蛭学』との題目で優に1冊の書籍を書くことができるだろう。しかし、現在の筆者にはその膨大な事柄を扱う余裕もなければその準備もない。ホタル科の文化昆虫学的概説として、高田(2011)がある。本稿では高田(2011)が言及しなかった現代(戦後昭和～平成)サブカルチャーにおける事例、また新聞記事を主要資料とした近代(明治～大正期)の事例を文化蛭学の断片的な話題として取り上げることとしたい。

I. 現代文化蛭学こぼれ話

ホタルほど屈強とは程遠いイメージを持たれる甲虫も珍しい。サブカルチャーで言えば、日本を代表するRPG『ドラゴンクエストシリーズ』にはホタルをモチーフとした敵モンスターは存在しない(ただし完全オンラインの10作目は筆者未プレイで関知せず)。コミック『暁!! 男塾 青年よ、大死を抱け』(宮下あきら, 集英社)には「人喰冥骸蛭」との人の血を吸うホタルが登場するが、それら吸血ホタルに奇怪性を見出すことはできても、力強さが付与されているとは言い難い。

よって、ホタル型の戦闘マシンと言うのもあまり想定できない。筆者がかろうじて思いつくとす



図2. ホタルジャイロのトイ外箱(2016年タカラトミー発売) © タツノコプロ・読売テレビ

れば『タイムボカン』(1975年放送のTVアニメーション)の「ヘリボタル」、同シリーズ『タイムボカン24』(2016年)の「ホタルジャイロ」程度である。しかし、「ヘリボタル」「ホタルジャイロ」とも主力戦闘メカの周辺をウロウロする付属機としての扱いでしかない。さらに、両者はホタル型メカとされつつも、実際のホタルの形態からはあまりにほど遠い外見である(図1および2)。なぜホタル型戦闘機の姿形は実物を忠実に反映していないのか、この疑問については何分「ヘリボタル」「ホタルジャイロ」以外のホタル型戦闘機に心当たりがなく比較考察できないので、現段階では回答を留保しておくしかない。

結局のところ、サブカルチャーにおけるホタルの立ち位置は詩歌、映画、文学と同様、第一義的には“季節の風物詩”にある。次いで、鎮魂ないしは猟奇性を体現する霊性生物としての扱いである。以下1章ではこの2点につき論考したいと思う。

1) 真夏の風物詩とされるホタルたち～野外個体群の発生時期との微妙なズレ

筆者の少なからぬ生徒は水辺で光るホタル、ようするにゲンジボタルとヘイケボタルをミンミンゼミやアブラゼミと同類の“真夏の虫”と認識していることがある。私事で恐縮ながら、筆者が昆虫学を本格的に学ぶ前の愛媛大学理学部生物学科1回生の頃のこと。所属するサークルの野生生物研究会の先輩から5月末に「ホタルを見に行くぞ」と言われ、酷く驚愕したことを今も鮮明に覚えている。うちの学生同様、当時の筆者も「ホタルとは盆踊りの帰りにウチワ片手に見物するもの」とばかり思い込んでいたからである。ゲンジボタルよりも遅く成虫が羽化し、発生期間が長いヘイケボタルは9月や10月まで成虫が見られることもあるから(中根・大場, 1981)、ホタルを“真夏の虫”と捉えるのは誤解とまでは言い難い。しかし、日本の大半の地域におけるヘイケボタルの成虫の見頃はやはり夏の前半である。梶田・青山(2010)は「ホタルの成虫は真夏でも真冬でもない初夏に出るが故に、日本の風物詩になり得た」と指摘する。しかし、「野外のホタルの発生時期は初夏だが、世間の一部にはホタルが真夏に出るとの理解がある」とまでは判断しなかったのか、この点については一切言及がない。

筆者は共通教育「自然史と生物」の授業を利用して、平成29年4月11日に福井大学の学生1~4回生の約120人にアンケートを行った。ずばり「ホタルは何月頃に見られると思うか?」との問いで

ある。回答は単月のみとし、“1~3月”のような期間回答は不可とした。回答母集団の特徴は「学生の出身県は福井を筆頭に、石川・岐阜・愛知・三重などの東海北陸が殆ど。知的レベルは地方国立大学程度。卒業単位取得のためにやむなく筆者の講義を履修しているので、学生の大半は特別生き物に興味があるわけではない」と纏められよう。

福井県の場合、大雑把に言うならゲンジボタルの成虫発生最盛期は6月上旬、ヘイケボタルの最盛期は6月下旬である。アンケートでは意図的にゲンジかヘイケかを問わなかった(彼らは特に動物学を学んでいるわけではないので正確な種和名を持ち出しても混乱を招くだけ)、今回の問いに対する理想の回答は一応“6月”となる。

結果は表1のようになった。最も回答数が多かったのは7月である。“7月”と言っても梅雨明け前の上旬か、夏本番の下旬かで随分意味合いが変わってくるので、このアンケート結果の解釈は難しいところだ。「2/3の学生がホタルの見頃は6~7月の夏前半と正しく回答した」、とポジティブに捉えることもできようが、筆者は「半分以上の学生はホタルを真夏の虫と思っている」とネガティブに解釈したい。少なくとも1/3の学生が「ホタルの季節は8月以降」と感じている点は見逃せないと思う。なお、教員免許をすでに取得している大学院生(修士1年)の6人にも同じ質問をぶつけたところ、6月:2人、8月:2人、9月:1人、10月:1人との回答内訳になった。母数は極端に少ないが、学部学生と同様の結果となっている。

ここで注意すべきは「ホタルは真夏の虫」と直感する一部本学学生や一般市民でも、「ホタルは初夏が見頃」との科学的知見に触れる機会は日常生活

表1. 福大生へのアンケート結果。

月	人数
1月	0
2月	0
3月	0
4月	0
5月	6
6月	30
7月	43
8月	30
9月	12
10月	1
11月	0
12月	0
計	122

活中に十分あると言うことだ。試しに筆者が学生に「福井市一乗谷のホタル祭りはいつぐらいに実施されているか思い出してみろ」と問えば、彼らは「確か6月中旬でした。あっ、言われてみればホタルは初夏の虫ですね」と寸時に理解するのである。福井に限らず、同時期のホタル観賞イベントなんぞ全国どこにでもあるではないか。

新聞記事もホタルが初夏の風物詩であることを正しく伝えている。筆者は朝日新聞記事データベース「聞蔵IIビジュアル」を用いて、「ゲンジボタル」「ヘイケボタル」の単語で記事検索を行い、2014～2016年の3年間でそれぞれの単語を含む記事が掲載された月ごとの件数を数えてみた。なお、「聞蔵IIビジュアル」は全国版記事だけでなく地方版記事もヒットするので、以下の結果は特定地域の記事掲載の傾向ではない。

記事検索の結果は表2のようになった。3年間の合計掲載記事数はゲンジボタルがヘイケボタルの約3倍に上ったが、両者の差異の考察は本稿の目的ではないのでこれ以上踏み込まない。ゲンジボタルは言わずもがな、ヘイケボタルの方も新聞記事は5～6月の初夏が最も多く、8月の新聞紙面には殆ど登場していないことがわかる。ホタル関連の新聞記事掲載が初夏に集中するとの傾向は、“ホタル”との用語によるGoogle検索回数が6月にピークを迎えるとのTakada (2012)の調査結果にほぼ一致する。

結論を言えば、平均的日本人は、直感はともかくとして、ホタルの見頃が初夏であるとの知識を薄々ながらも有しているはずなのだ。前述の『源

氏物語』第25帖「蛭」は源氏の君36歳5月の物語なので、かの紫式部もホタルが初夏の昆虫であることを承知していた。なのに、現代サブカルチャーの虚構世界ではなぜかホタルが見頃の初夏より遅い真夏の風物詩として描写されていることが少なくない。以下、電子ゲーム3作品を取り上げてみよう。

例えば、『初音ミク -Project DIVA- F』(2013年)収録の楽曲「タイムマシン」のPV中(プロモーションビデオ)では、8月と書かれたカレンダーや満開のヒマワリ畑、入道雲等を背景にして、初音ミクがスイカを頬張り、そして数多のホタルと戯れる描写がある。映像からは「タイムマシン」のPVは8月上旬頃をイメージしているとはかと思えない。次に『ぼくのなつやすみ』(2000年)では、主人公の“ボク”が寄宿先の叔父さんの目を盗んでホタルの乱舞をこっそり見に行くのは8月5日である。これら両作品は時期設定が8月上旬なのでまだ許せよう。『そらいろ』(2009年)になると、「夏の忘れ物を取り戻す」との思いたちで、主人公とヒロインの花子がホタル狩りをするのは何と9月中旬である。これはさすがに無理がありすぎる。

本稿で例としたのは僅か上記ゲーム3作品だが、アニメやマンガに対象を広げると登場人物達、特にカップルが8月にホタルを鑑賞するシーンなんぞゴマンとある。うちの一部の大学生がホタルを真夏の虫と思い込む一因は、サブカルチャー諸作品からの影響もあるのではないか。では、実際の野外個体群と諸作品中のホタルの発生時期の微妙なズレは何に起因するのか? 残念ながら、筆者はこの疑問に対し満足できる考察にたどり着けていない。ホタルには“納涼”とのイメージが強く(荒川, 1918)、それ故に「暑い昼間の後、夜にホタルを鑑賞して涼を楽しみたい」との人々の願望が、ホタルを実物以上に8月と関連付けたかとも思われるが、これは筆者の根拠なき憶測でしかない。また、上述の筆者の教え子の大学院生6人のうちの1人が「ホタルにはお月見のイメージがあるから秋の虫」と述べたことも引っかけ。学部学生122人中13人の「ホタルは9月～10月が見頃」と一見頓珍漢にも思える回答は(表1)、ホタルが月夜の下を飛び交う姿からの単純連想の現れなのか。

ホタルの実際の成虫発生最盛期と人々の直感の間の差については不明な点が多い。ただ、学園を舞台にした恋愛ストーリーのゲームやマンガのホタルに考察対象を限定すれば、筆者は一応以下のように解釈している。

クリエイターにとって学生キャラクターの恋愛

表2. 聞蔵IIビジュアルでヒットした月別記事数。

検索語	ゲンジボタル	ヘイケボタル
1月	3	1
2月	6	1
3月	10	3
4月	8	5
5月	43	16
6月	65	20
7月	14	2
8月	7	1
9月	3	0
10月	1	2
11月	3	0
12月	6	2
計	169	53

数字は2014～2016年の3年間の合計数。

物語を進展させるのに8月は大変使い勝手が良い月だ。何と言っても開放的な季節だし、7月20日以降はキャラクターを教室から解き放ったうえ水着や浴衣を着せられる。これらの仕様は初夏には絶対適用できない。そして、カップルないしは友達以上恋人未満の男女がホタルを見つめるシーンはベタではあるが効果的な演出だ。ホタルを8月に飛ばしても決して生物学的に間違いではない……。そんなこんなで二次元虚構の世界では、ホタルたちはやや時季外れの8月の夜陰に颯爽と乱舞しているのではなかろうか。

2) 霊性および伝奇性の形象としてのホタル

漆黒の闇を仄かに照らすホタルに対し、単に美しく儂い虫との通常の認識とは別に、霊性や猟奇性、鎮魂などの性質や心情を見出す場合がある(梶田・青山, 2010)。野坂昭如『火垂るの墓』は蛍の乱舞をレクイエムに準えた代表的事例の一つだろう(ただし筆者は本作未読)。

日本人がホタルに霊的な何かを感じ始めたのは別に近來ではない。和泉式部「もの思へば沢の螢もわが身より あくがれいづる魂かとぞ見る」との歌は、暗い夜、淡く青白い光をともして飛び交うホタルは、自分の身からあくがれ出た魂ではないか、との思いで詠まれた。古来日本人はこの明滅するホタルの青白い光を魂の姿と見做したと言う(碓井, 1982)。また、宇治のホタルは平安末の同地での合戦で敗れた源頼政の亡魂であるとの逸話も有名だ(神田, 1981)。

ホタルに霊性を見出す発想は日本固有のものではない。例えば、隣国中国のホタルにまつわる故事と言えば螢雪の功があまりに有名であるが、その一方で農村部にはホタルを死者の魂が化したものとする信仰があった。旧暦の7月は鬼月と呼ばれ、この月の朔日には地獄の門が開き、生前の親族や仇を求める死者の霊が現世に戻ってくるとされていた。そして、その迷信の由来は、7月のホタルの姿が民衆に霊を連想させたのではないかとの考察がある(瀬川, 2016)。また、東南アジアの一部地域でも「ホタルを見ると魂を亡くす」との迷信があると言う(梶田・青山, 2010)。

現代日本サブカルチャーではホタルは本章(1)で述べたように、大体男女の“キャッキョウフフ”の場面で都合よく使われているのであるが、霊性生物としての扱いも少数ながら存在する。ゲーム『Green Strawberry』(2010年)では、主人公とヒロインの美風が恋懸けの泉で「いつまでも二人でいられますように」と祈ると、突如ホタルが幻想的



図3. 『そらいろ』(2009年)より。©ねこねこソフト

に舞い始める場面がある。この作品におけるホタルは求愛の象徴との意味合いが強いが、一方で人々の願いを叶える超自然現象的な性格も含有している。次に、ゲーム『そらいろ』(2009年)では、主人公とヒロインの花子が宝探しに出かける。その際「月より降りし迦具土の雨、精霊となりて千代を舞う」のヒントをもとに二人は防空壕にたどり着き、その出口で幻想的なホタルの群れと出会って物語はエンディングとなる(図3)。言うまでもなく、防空壕とは死と隣り合わせの存在だ。『そらいろ』では、ホタルに死霊的な印象が重ねられているわけである。

ゲーム『螢火ノ少女』(2014年)は文化昆虫学的に特筆すべき作品だ。本作では生まれ故郷の螢火島(旧名:九尾島)に戻った兄妹が猟奇的惨劇に巻き込まれるストーリーが紡がれる。ゲーム起動時にホタルが乱舞するなど、作品中ではこれでもかとばかりにホタルが現出する。螢火島には死者を蘇らせる儀式があり、ホタルが生と死の両世界の境界を繋ぐ不気味な存在として描かれている。また、螢火島固有種のキュウビホタルの持つ有毒物質が違法ドラッグに精製されているとの別面もあり、ホタルは現実社会の犯罪組織の商品との設定でもある。軟鞘類が持つ生物化学的特徴が作品で生かされているわけだ。このように『螢火ノ少女』のホタルの扱いは一筋縄ではいかないが、ホタルが猟奇的死の形象であることは確かだ。

もっとも、上記の霊性ホタル達はヘビ型、キツネ型モンスターと異なり、人に魔法をかけたか、幻惑を見せたりと言った攻撃を仕掛けてくる存在ではない点には留意すべきであろう。ホタルはあくまで伝奇的、霊的な雰囲気盛り上げるための鬼気迫る背景としての要因なのである。

本稿では現代文化蛍学のトピックとして以上の2

点に着目したが、人々に鍾愛されるホタルにはこの他にも探求すべき文化昆虫学的事項は多い。今後、考察を深めていきたいと考えている。

II. 近代文化蛭学こぼれ話

明治初期にアメリカから来日したお雇い外国人のグリフィスは、日本人は「雄のホタルは危険を顧みず雌を愛する情熱を有した昆虫」との蛭観を持っていると考えた。しかし、これは日本語を自由自在に操れたわけではないグリフィスの勘違いではないかと筆者は考察したことがある(保科, 2014)。少なくとも荒川(1918)や神田(1981)、若月(1992)などを見る限りでは、明治大正期の日本人のホタルに対する見方は現代人のそれと大差があるようには思えない。

筆者は近代(明治初年～昭和20年)の新聞記事でホタルがどのように取り上げられているかに着目した。戦後のホタル関連の新聞記事については遊磨・永江(2000)の概説があるが、本稿では調査対象を近代に絞った。以下、2点について論考してみる。本稿では新聞記事を引用する場合、東京朝日新聞、読売新聞、都新聞についてはそれぞれ、東京朝日、読売、都と略した。他の新聞(萬朝報、運輸日報、中央新聞)については略称を用いていない。また、記事の掲載年や日付を以下のように略記した。

(例)

明治27年11月22日付都新聞を引用する場合：
M27. 11. 22. 都

明治37年2月8日付東京朝日新聞：M37. 2. 8. 東京朝日

大正3年8月4日付読売新聞：T3. 8. 4. 読売

昭和16年12月8日付読売新聞：S16. 12. 8. 読売

1) 明治大正期のホタルの価格

検索サイトで「ゲンジボタル 価格」との文言で検索すると何かしらの通販ショップのサイトが引っかかる。現在ゲンジボタルとヘイケボタルは通販商品として扱われているわけだが、身近にあるペットショップやホームセンターでホタルが売られている現場にはそうそう出くわさない。しかし、近代期ではホタルは町中の縁日等で普通に売られていた。神田左京はホタルを扱っていた東京の縁日の場所として、銀座、浅草、上野、本郷、麴町、新宿、池袋、東中野、大森を記録している(神田, 1981)。

人々は縁日の屋台からホタルを買ったが、その他の場所からも入手する機会があった。例えば、明治18年7月、下谷萬年町の虫売商人の池田嘉兵衛が

根津八重垣町の貸座敷(遊女屋)でホタル数千匹を籠に入れて売っていたところ、天上に吊っていたランプが落ちてきて、商品のホタルやスズムシが哀れ黒焦げになってしまったと言う(M18. 7. 28. 読売)。典型的な三面記事だが、当時のホタル売りの実態や商売規模が良くわかる資料となっている。

では、明治大正期、ホタルは1頭如何ほどの価格で売られていたのだろうか? 幸い、現在とは異なり当時の新聞には「虫相場」と言って、売られていた虫の市場価格が時折記事になっていた。それらの記事掲載のホタルの価格を抜粋したのが表3である。比較材料として、スズムシ1頭と東京朝日新聞1部(注、厳密には明治19年と同21年の新聞価格は大阪発刊の朝日新聞のもの。明治22年以降は東京のめざまし新聞を買取改題した東京朝日新聞の価格)の値段を同時に掲載した。分数表記(価格/頭数)となっているホタルの値段は新聞記事に“6頭1銭”のような相場で記載されていたことを意味する。コオロギ類と異なり、ホタルは単頭売りされない事も多かったらしい。一方、少数表記は“蛭は5厘”と言った厘単位の価格を銭に換算したものである(10厘=1銭)。以下、虫相場および関連記事の調査から読み取れた9点につき、それぞれ解説してみる。

まず、判明した明治大正期のホタルの価格で最も古い年は明治19年である。しかし、これは明治中頃からホタルが商品として出回り始めたことを意味するわけではない。明治初年から同20年あたりまで、本稿では引用しなかった東京日日新聞、東京曙新聞、東京横浜毎日新聞、朝野新聞、自由新聞、郵便報知新聞、仮名読新聞などの諸紙を筆者は散々調べたが、該当する虫相場の記事を見つけられなかったと言うだけの話である。虫売の商売形態が江戸期には既に成立していたことを鑑みると、明治初年～10年代に鳴く虫やスズムシが東京市中で売られていなかったとは考え難い。

2番目。新聞記事からは「螢○頭で△銭」等の情報しか得られないので、売られていたホタルがゲンジボタルかヘイケボタルかを判断することはできない。時期によっては両者混同で売られていた可能性もある。

3番目。筆者は明治19年から昭和16年までの虫相場記事を収集できた。しかし、スズムシやマツムシ、カンタンについては明治19年以降の近代約60年間の1年ないしは数年間隔の価格変動を明らかにできたが(Hoshina, 2017)、表3のようにホタルの価格データは大正15年を最後として少ない。虫相場の記事中でホタルの価格については一切言及されることが多かったからである。

表3. 明治大正期のホタル・スズムシ・東京朝日新聞の価格.

和暦	ホタル	スズムシ	東京朝日	価格の典拠
明治 19 年	1/3~1/2 銭	4~5 銭	1.5 銭	6. 13. 読売
明治 21 年	1/6 銭	2.5~3 銭	1 銭	7. 10. 東京朝日
明治 22 年	1/7 銭	3 銭	1 銭	6. 15. 東京朝日
明治 23 年	1.5 銭	3.5 銭	1 銭	6. 26. 東京朝日
明治 24 年	1/10~1/4 銭		1.5 銭	6. 3. 東京朝日
明治 25 年	1 銭	4 銭	1.5 銭	6. 26. 読売
明治 30 年	0.3 銭	4 銭	1 銭	6. 22. 東京朝日
明治 35 年	0.5~1 銭	7 銭	1.5 銭	6. 8. 東京朝日
明治 36 年	1/5~1/4 銭	4 銭	1.5 銭	5. 31. 東京朝日
明治 37 年	0.2~0.5 銭	3.5 銭	1.5 銭	6. 22. 東京朝日
明治 39 年	0.5~0.6 銭		2 銭	5. 8. 東京朝日
明治 40 年	3/10 銭	5 銭	2 銭	5. 28. 都
明治 40 年	0.5 銭 or 1/3 銭	5 銭	2 銭	5. 28. 東京朝日
大正3年	1/3 銭		2 銭	6. 10. 読売
大正3年	1/5 銭		2 銭	6. 18. 読売
大正6年	500/100 銭	5 銭	2 銭	6. 19. 運輸日報
大正 11 年	1/10 銭		4 銭	5. 18. 東京朝日
大正 15 年	1 銭		3 銭	6. 10. 読売

※東京朝日新聞の価格はその年の1月時の新聞1部の値段。本文参照。

※典拠となった新聞記事の和暦は省略。それぞれ表左段の和暦と同じ。

※分数および少数表記については本文を参照。

※スズムシの価格の空白箇所は同一記事中に表記がなかったもの。

※運輸日報は原紙現存せず。雑誌『昆虫世界』21巻239号より孫引き。

4 番目。貸座敷で商売をしていた池田嘉兵衛のように、スズムシなどの鳴く虫とホタルの両方を売る虫売商人がいた。当然、両者は同じ虫の仲間だから同一商人が扱っていたのだろうが、季節的な事情も関係したと思われる。毎年、東京の虫売の先陣を切ったのは5月28日の深川不動の縁日であった(若月, 1992; T10. 5. 7. 読売)。スズムシやマツムシは5月末の虫売に合わせ養殖個体が出荷されていたが、言うまでもなくこの時期はゲンジボタル成虫の発生期と重なっている。なお、若月(1992)に「縁日なんぞで螢賣の店を見ることがあるが、蟲賣の店と共に云々」との記録があるので、鳴く虫とホタルは常に同一店舗で売られていたわけではない。ホタルだけを販売する店舗もあったわけである。

5 番目。当時の新聞記事の虫相場には鳴く虫やホタルの他、カジカガエルの価格も掲載されていた。売られていたカジカガエルは全てが同価値ではなく、並、上などのランク付けがなされ、それに応じた値段が付けられていた。大まかに言って年齢が高い個体(≡体が大きい個体)が高く取引されていた(若月, 1992)。例えば、大正8年時は当歳物の並が10~20銭、上50銭、二歳以上の個体は50銭~1円30銭と価格にかなりの差がついていた

(T8. 6. 27. 中央新聞)。7~8歳の老齢個体だと10円もの値段が付けられたこともある(M36. 5. 31. 東京朝日)。またカジカガエルは体サイズだけでなく産地によっても序列化され、本場とされる京都鴨川産の個体は秩父産の倍の価格で売られることもあった(M40. 5. 28. 東京朝日)。

スズムシもカジカガエルほどではないにせよ、たまに高い付加価値を持つ個体が商品中に見出された。例えば、特別良い声で鳴くスズムシは“遠寺の鐘”“月下の露”などの雅な名を与えられ、一般個体の4倍もの値段が付けられることもあった(M35. 6. 8. 東京朝日)。

一方、ホタルの場合、宇治で捕れたホタルは東京の個体より倍以上光る等の認識が虫売業界にはあった(M25. 6. 26. 読売)。新聞記事には「宇治の個体は東京産の二頭と合わせたものより強く光る」とあるので、素直に読むなら虫売業界のホタル内のこの優劣はゲンジボタルの東西型の点滅間隔の違いで決められていたわけではなさそうだ。何はともあれ特定の産地がブランド化され、そのホタルだけが常に高値で取引されていたと言った類の新聞記事を今のところ見つけ出していない。一部「甲州産の大螢一銭に四疋, 近在物一銭に十疋位」(M24. 6. 3. 東京朝日)、「螢は一番五厘, 並二厘」(M37. 6.

22. 東京朝日) とのランク付けがあったことをうかがわせる記事事例はあるが、多くのホタルは同一売り場では同価格で売られていたようである。

6 番目。筆者が調べた限りでは、大正 6 年の運輸日報の記事以降、新聞の鳴く虫中心の虫相場のコーナーからホタルは姿を消した(表 3)。大正 11 年及び 15 年の価格データは従来の虫相場ではなく、ホタルだけを扱った記事中にあったものである。実はカジカガエルも大正 13 年 7 月 11 日付の読売新聞を最後に、東京朝日・読売・都の 3 紙の虫相場に登場しなくなっている。その後の昭和 5~10 年は鳴く虫の虫売が大盛況となった時代で(加納, 1990)、それを反映してか鳴く虫の虫相場は毎年のように新聞に掲載されていた(Hoshina, 2017)。その反面、ホタルとカジカガエルの相場は大正中頃~終りに新聞の虫相場のコーナーから消えたわけだが、その理由は定かでない。単純に考えれば、両者の市場規模が小さくなった、ないしは流通や販売システムが変わった等の可能性が思い浮かぶわけだが、筆者は何かしらの推論をここで提示できるだけの資料を有していない。その後も虫売と呼ばれる商売が継続していたことは確かなのだが(例えば S4. 6. 4. 読売。図 4)、ホタルが大正半ば以降虫相場で扱われなくなった要因については考察を避けたい。

7 番目。東京の縁日で売られていたホタルは主に関東近隣で捕獲された個体だった。ホタルの出荷産地としては甲州や見沼、大宮、鳩ヶ谷、宇都宮、玉川、目黒池上などの地名が記事中に散見される(M35. 6. 8. 東京朝日; M36. 5. 31. 東京朝日; M40. 5. 28. 東京朝日)。また、鉄道の発達は東京のホタル売りにも影響を与えた。明治 22 年に新橋—神戸間の東海道官設鉄道が全通したが(老川, 2014)、3 年後の明治 25 年には京都宇治から数千匹のホタルが初めて汽車で運ばれ、東京府下の問屋へ送られた。宇治のホタルは 1 頭で東京府発生のホタル 2 頭分の光を放ち、人々は「さすが宇治はホタルの名所だ」と驚いたと言う(上述)。ただ、宇治のホタルは弱くて多くの個体がすぐに死んだ。業界人達は「死因は気候の違いではないか」と考えたらしいが(M25. 6. 26. 読売)、長距離の輸送でホタルが弱ってしまったことも大きな要因だろう。

8 番目。ホタルの価格は生鮮野菜のようなもので、同年・同シーズンであっても週単位、月単位で大きく変動した。例えば、明治 37 年 6 月中旬の時点でホタルは 2~5 厘の価格であったが(表 3)、成虫の出盛りには 1 厘ぐらいに値下がりするだろうと観測されている(M37. 6. 22. 東京朝日)。また、明治 40 年は天候不順でホタルの発育が悪く、5 月

末時点で埼玉見沼産ホタルが 1 頭 5 厘程度とやや割高であった。しかし、翌月の 5、6 日頃には東京玉川産が入荷するので 1 頭 2 厘程度には下落するだろうとの見通しがあった(M40. 5. 28. 東京朝日)。商品ホタルの供給源は自然個体群なのだから、当然産地ごとに最発生期のズレがある。ある産地から大量の個体が入荷されれば、市場の相場が一気に下がると言うのは十分あり得る話だ。

9 番目。最も重要なホタルの価格に関する考察である。ホタルを入れる籠は子供用のおもちゃ 5 銭、中等 15~27 銭、上等 40~80 銭と、上等になればそこそこの値段がした(M36. 5. 31. 東京朝日)。明治末頃にはもはや美術品と呼ぶべき 20 円もする超高級ホタル籠も登場した(若月, 1992)。明治 30 年代~40 年代の大工の日当が約 1 円と言う時代である(森永, 2008)。虫籠 20 円との値段が如何に無茶な数字であるかがわかる。なお、大正末の鳴く虫用の虫籠の話であるが、数十円する極端に高い代物は店頭で陳列されていても殆ど売れなかったと言う(T14. 7. 30. 読売)。

ホタルの比較対象としたスズムシは新聞 1 部の 2~4 倍の値段だったから(表 3)、現在の我々の感覚に近い。近代日本のスズムシはマツムシやカントシ、クツワムシなど鳴く虫の中で最も安価であっただけでなく、年による価格変動が最も小さかったコオロギ類である(Hoshina, 2017)。これは江戸期にはスズムシの養殖から仕入れ、販売と言った流通システムが既に確立しており(加納, 2011)、天候不順等の影響をあまり受けることなく供給量



初夏の宵螢賣りの風情
ゆうべ銀座で

図4. 昭和 4 年 6 月 4 日付読売新聞。

が安定していたからだと思われる。

明治期のホタルはそのスズムシよりさらに安かった(表3)。大正6年には1頭あたり5銭でスズムシと同価となったが、概して近代のホタルはスズムシより遥かに安値である。明治22年には新聞1部のカネでホタルが7頭、大正11年には40頭も買えたと言うのだから驚きだ。現在のゲンジボタル・ヘイケボタルの通販ショップでは、幼虫成虫とも1頭数百円～500円程度が相場なので、当時のホタルが如何に安値であったかがわかる。この数字から100年前の日本は首都圏であってもちょっと郊外に出かければ、ホタルなんぞ腐るほど飛んでいた、と言うことが窺えるのである。

2) 近代エコツーリズムの先駆けとしてのホタル

若月(1992)は明治末頃の東京におけるホタル発生地として、王子、目白、目黒、廣尾、玉川、本所柳島、向島を挙げつつも「今の東京人でこれらの場所へホタルを見に行くのは余程の暇人か近所の人間のみで、もはやホタルの名所とは呼べない」と切って捨てている。さすがに大正になろうかと言う時代になると東京のど真ん中では無数のホタル達の乱舞は見られ難くなっていた。しかし、大正前半期でも向島でホタルがぼつぼつ発生したことがわざわざ新聞記事になっていることを鑑みる

と(T4.7.7.萬朝報)、東京府下のホタルは人々になお関心を寄せられる存在ではあった。

荒川(1918)と若月(1992)がホタルの名所として挙げている土地の一つが埼玉大宮である。「大宮氷川公園附近見沼用水名物のホタルは来月10日頃美観を呈する見込」と見頃の時期が新聞で紹介されているほどだ(M45.5.31.萬朝報)。また、大宮町の官幣大社の氷川神社では宮司が清らかな狩衣を纏い、天皇皇后両陛下、および東宮両皇子三殿下に奉納する3千頭のホタルを捕獲したとの記録があり(T5.6.4.萬朝報)、ホタルの本場としての大宮の知名度が推知できよう。明治末頃は東京から汽車で大宮に向かい、ホタルを見ながら酒を飲み明かす人々も少なくなく、東京の螢狩りと言えば今や大宮を連想させる域であったと言う(若月,1992)。

向かえる大宮の旅館業界の側も東京人をターゲットにホタルを利用した営業活動を行っていた。例えば、松友館と言う旅館は客室に居ながらホタルを見物できることを売りにして、開業五周年の客室増築に踏み切った(M30.5.27.都)。また、大宮氷川公園の公木樓・萬松樓の両旅館は舟上でホタルを見物できるサービスを提供し、東京発行の都新聞に広告を出している(M28.5.25.都)(図5)。

兵庫県旧出石町桜尾(現豊岡市)は明治後期から昭和初期にかけてコウノトリ見物のための茶店が開設され、京阪神から鉄道乗り継いで遙々やって来る客がいた。多い時で1日2千人もの客が同地を訪れたと言う(菊池,2006)。ホタルとコウノトリの違いはあれど、大宮のホタルを活用した観光業もまた近代エコツーリズムの原型の一つと呼んでいいだろう。しかし、ホタルの名所として栄華を誇った大宮も昭和10年頃にはホタルは激減していた。神田(1981)によると乱獲が原因であると言う。

遠方にまでホタル見物に出かける観光客がいる一方で、逆に郊外から東京にホタルを持ち込んで大衆に見せる催しも始まった。もちろん、現在の保全生態学上の理論から言えば、遠隔地から持ち込んだホタルの放虫は決して為すべきではない。しかし、かつては鑑賞のための大量放虫が盛んに行われていた。明治末頃に滋賀産のホタルが丸の内の宮城前で放されたのを契機として、上野不忍池や玉川二子橋でも「螢會」が催され、時に万単位でホタルが放虫されたと言う(若月,1992)。

筆者は本章(1)で「ホタルの相場は大正中頃に新聞紙面の虫相場から消えたが、その理由については提示できる推論はない」と述べた。ホタルが虫相場で扱われなくなった背景には、交通網の発達や放虫の流行で、ホタルは個人が数頭～10数頭単位で

図5. 明治28年5月25日付都新聞広告。